第３講　共通テスト追試験　第１問

第１問

次の文章は、二十世紀末までのメディア環境について述べたもので、言葉の生産と流通をめぐる社会的諸関係を「言葉のエコノミー」と規定した後に続く部分である。これを読んで、後の問い（**問１〜６**）に答えよ。（配点　50）

言葉のエコノミーの空間に文字が持ち込んだ重要なことの一つは、言葉が声以外の表現媒体を持つことによって、言葉の一次的な媒体であった「声」と二次的な媒体である「文字」との間に時間的・空間的な「へだたり」が持ち込まれたということである。

文字に書かれることで、言葉は「声」と「文字」とに分裂する。この時、声の方はしばしば言葉を発する身体に直接属する「内的」なものとして位置づけられ、他方、文字の方はそのような「内面」から距離化された「表層」に位置づけられる。だが、ここで注意したいのは、A<u>声としての言葉もすでに、その内部に文字と同じようなへだたりをもっていたということだ</u>。

このことは、「声」と「音」との区別を考えてみると分かりやすい。

「音声」という言葉があるように、普通言う意味での人間の声は音である。では、声である音と声でない音とはどう違うのか。音声学的な音の特性によって区別することも可能である。たとえば、楽器の音の音波形には完全な周期性が見られるが、人間の声にはそのような完全な周期性は見られない。ヴィブラートによる声のソウ(ア)<u>ショク</u>

メモ欄

は、人間の声のこの特性を利用している。だが、さしあたりそのような音声学的な特性とは別に考えるとすれば、私たちは普通、人間のような生物の、心のような内的なものにかかわる意味をともなって発せられる音を「声」と呼んで、物や体が擦れ合ったりぶつかったりして出る「音」から区別しているのだと言うことができる。

　もう少し抽象的な言い方をすれば、声には「内部（内面）」があるが、音には「内部（内面）」がない。「声としての音」の背後には、声としての音には(イ)カンゲンされない「何か」が存在しており、声はその「何か」を表現する音であることで「言葉」になる。音としての声が表現するこの「何か」は、しばしば言葉を発する人間の身体の内部や心の内部にあるものと考えられる。この時、身体に発する音は、身体や心の内部にあるものを表現するメディアであることで「声」になる。あるいは物理学者ホーキング(注1)の音声合成装置から発する「声」のように、人の身体から直接発したのではない音でも、人に発する意志や意味を表現することによって声になるのである。

　声は言葉のメディア（あるいは意味のメディア）であることによって、ただの音とは異なる内的なへだたりを自らの内に孕(はら)む。声の向こう側にある「何か」は、必ずしも近代的な意味での「主体」や「自我」である必要はない。人間の歴史のなかで、人は時に神や(ウ)ソセンの言葉を語り、部族や身分の言葉を語ってきた。このような場合、人は私たちが知るような「内面」として語っているのではない。人は自らを媒介として「誰か」の言葉を語る。B「私」とは、その「誰か」が取りうる一つの位相に過ぎない。このことは、声やそれを発する身体もまた、語られる言葉にとっては一つのメディアであることを意味している。

メモ欄

話される言葉の向こうに居る者が誰であるのかは、言葉のエコノミーの構造を決定する重要な条件である。近代の社会はこの「誰か」を、もっぱら語る身体の内部にある「私」へと帰属させるようにして、言葉のエコノミーの空間を組織してきた。

声を電気的に複製し、再生し、転送するメディアが現われるのは、言葉、とりわけ声を人々の内部へとつなぎとめるこの近代という時代の、十九世紀も後半になってからのことである。電話やレコードのように音声を電気的に再生し、伝達し、蓄積する一群の技術が発明・開発されると、これらの技術を利用した複製メディアの中に、肉体から切り離されて複製された「声」が現われる。

電気的なメディアによる声の再生、蓄積、転送は、声としての言葉とそれを発話する人間の身体とを時間的・空間的に切り離す。電話やラジオの場合、話される言葉は、話されるとほぼ同時に、話す身体とは遠く離れた場所で再生される。この時、電話やラジオは、話す身体と話される言葉を空間的に切り離している。他方、[注2]レコードやテープ、ＣＤの場合、声としての言葉はそれを発する身体から時間的にも切り離され、任意の時間に任意の場所で、話し手や歌い手の意思にかかわりなく再生される。そこでは声は、ちょうど文字のように、それを発する身体から空間的にも時間的にも切り離されて生産され、流通し、消費される。

電気的な複製メディアの初期の発明者たちは、これらのメディアが言葉のエコノミーにもたらすこの時間的・空間的なへだたりを、直観的に理解していたように思われる。電話を意味する〝telephone〟は、「遠い」teleと「音」phoneが結びつくところに成立している。また、初期のレコードの発明者たちが彼らの発明に与えたフォノグラフやグ

メモ欄

ラフォフォン、グラモフォン等の名は、「音」phoneと「文字（書）」graph, gramを組み合わせて造語されている。これらの名は、声を身体から遠く引き離し、かつて文字がそうしたように、声としての言葉を蓄積し、転送し、再現することを可能にするという、これらのメディアの原理的なあり方を表現している。

　電気的な複製メディアの中の声は「書かれた声」、「遠い声」である。それらは、その所記性（注3）や遠隔性によって、文字が言葉のエコノミーに持ち込んだ声と言葉の間のへだたりと同じようなへだたりを、複製される声とその声を発した身体の間に持ち込むのである。

　電気的なメディアの中の「書かれた声」「遠い声」は、言葉のエコノミーの空間に何をもたらしているのだろうか。

　かつて文字というメディアは、「声でない言葉」をつくり出すことで、言葉から声を引き剝がし、やがてそれを人びとの内部（内面）に帰属させていった。電気的な複製メディアは、声としての言葉を語り・歌う身体から切り離し、引き剝がすことによって、声が身体にとって外在的な位相をとることを可能にする。

　すでに述べたように、声としての言葉はそもそも、それが表現する「内部」にたいして外在的な「音」としての位相をもっていた。だから、より精確に言えば、電気的な複製メディアは声を、それを語り・歌う身体から時間的・空間的に切り離すことで、言葉としての声が内的に孕むあのへだたりを顕在化するのだというべきだろう。

　電気的な複製メディアにおいて、再生される声とそれを語る身体は相互に外在しあう。この時、声と身体は、それまで互いを結びつけてきた言葉のエコノミーから束（つか）の

メモ欄

間解放される。たとえば筆者たちがインタヴューした「電話中毒」の大学生の一人は、深夜の長電話の最中に自分が「声だけになっている」ような感覚をもつことがあると語っていた。また、精神科医の大平健が報告する事例において、ある女性は無言電話[注4]における他者との関係の感覚を、エレクトロニクス[注5]の技術と機械とを結びつけた言葉である「メカトロ」という機械的な隠喩によって語っている。このような身体感覚（あるいは脱―身体感覚）は、語る身体と語られる声とが相互に外在化する電気的な複製メディアのなかの空間で、語り手の主体性が身体にたいして外在したり、身体から切り離された声の側に投射されたりすることを示している。

　レコードやＣＤのように、時に様々な加工をほどこされた声を蓄積し、再生するメディアや、ラジオ番組やテレビ番組のような組織的に編集された「作品」のなかの声の場合、事情はより複雑である。これらのメディアの中で、声はそれを語り・歌う者を主体とする表現という形をとる場合もある。だが、そのような表現はつねに、語り・歌う者以外の多くの人々による、声を対象とした様々な操作とともにある。そこでは声は主体としてではなく客体として対象化されており、さらに、そのようにして加工、編集された声は「商品」として多くの人々の前に現われ、消費される。このような場合、声はもはや特定の身体や主体に帰属するとは言いがたい。そこでは声は、語られ・歌われた言葉の生産、流通、消費をめぐる社会的な制度と技術の中に深く埋め込まれており、そのような制度と技術に支えられ、特定の人称への帰属から切り離され、テクスト[注6]のように多様な人々の中へと開かれる。そして時にはメディアの中のアイドルやＤＪたちのように、言葉を語り・歌う者の側が、生産され流通する声に帰属する者と

メモ欄

して現われたりもするのである。

電気的なメディアの中の声は、それを発した身体から時間的・空間的に切り離された声である。Ｃそれは時に声を発した身体の側を自らに帰属させて響き、また時には特定の人称から解き放たれて囁(ささや)きかける。電気的なメディアの中の声を聞く時、人が経験するのは身体に外在するこのような声の経験であり、それらの声が可能にする関係の構造の変容である。

（若林幹夫(わかばやしみきお)「メディアの中の声」による）

（注）１　ホーキング——イギリスの理論物理学者（一九四二—二〇一八）。難病により歩行や発声が困難であったため、補助器具を使っていた。

２　レコードやテープ、ＣＤ——音声や音楽を録音して再生するためのメディア。

３　所記性——書き記されていることのうち、意味内容としての性質。

４　無言電話——電話に出ても発信者が無言のままでいること。かつての電話には番号通知機能がなかった。

５　エレクトロニクス——通信・計測・情報処理などに関する学問。電子工学。

６　テクスト——文字で書かれたもの。文章や書物。

メモ欄

問１　傍線部(ア)〜(ウ)に相当する漢字を含むものを、次の各群の①〜④のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は［1］〜［3］。

(ア) ソウショク［1］

① 調査をイショクする
② キョショクに満ちた生活
③ ゴショクを発見する
④ フッショクできない不安

(イ) カンゲン［2］

① 首位をダッカンする
② 主張のコンカンを問う
③ カンシュウに倣う
④ カンサンとした町

(ウ) ソセン［3］

① クウソな議論
② ヘイソの努力
③ 禅宗のカイソ
④ 原告のハイソ

問２　傍線部Ａ「声としての言葉もすでに、その内部に文字と同じようなへだたりをもっていた」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は **４** 。

① 言葉は書かれることによって表層としての文字と内面としての声に分裂したが、もともと声に出された言葉にも音とそれが表現している内的なものとの間に差異があったということ。

② 言葉は書かれることによって一次的な声と二次的な文字に分裂したが、もともと声に出された言葉にも一次的な音としての性質と二次的な心の内部との間に距離があったということ。

③ 言葉は書かれることによって媒体としての文字と身体から発する声に分裂したが、もともと声に出された言葉にも客体としての音と主体としての声との間に違いがあったということ。

④ 言葉は書かれることによって時間性をともなった声と空間的に定着された文字に分裂したが、もともと声に出された言葉にも音声学的な音と生物学的な声との間に開きがあったということ。

⑤ 言葉は書かれることによって文字と声に分裂したが、もともと声に出された言葉にも完全な周期性をもった表層的な音と周期性をもたない内的な声との間にずれがあったということ。

問3　傍線部B「『私』とは、その『誰か』が取りうる一つの位相に過ぎない。」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①〜⑤のうちから一つ選べ。解答番号は　5　。

① 人間はもともと他者の言葉を語ったため音と身体との間にへだたりがあったが、声が「私」の内面を直接表現すると考える近代社会では両者の関係が密接になっているということ。

② 人間は歴史のなかで共同体の秩序とつながったメディアによって意志を決定していたが、近代社会では内面の声に従う「私」が他者からへだてられていったということ。

③ 声は本来人間の長い歴史を蓄積したメディアだったのであり、言葉をなかだちとして「私」が自我とは異なる他者と語りあうという近代社会の発想は一面的であるということ。

④ 声は元来現実の外部にある「何か」によって世界の意味を想定するメディアだったのであり、表現される考えが「私」の内部に帰属するという発想は近代になるまで現れなかったということ。

⑤ 声はかつて状況に応じて個人の意志を超えた様々な存在の言葉を伝えるメディアだったのであり、他者とは異なる「私」の内面を表すという近代的な発想が唯一のものではないということ。

問４　傍線部Ｃ「それは時に声を発した身体の側を自らに帰属させて響き、また時には特定の人称から解き放たれて囁きかける。」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は［６］。

① 電気的なメディアの中の声は、語り・歌う者から発した声を元に様々に複製された「商品」として流通したり、声を発する主体としての身体を感じさせない不気味なものとして享受されたりすることがあるということ。

② 電気的なメディアの中の声は、客体として対象化した声を「作品」とし、身体を付随させて流通したり、複雑な制度や技術から自由になったものとして多くの人々に受容されたりすることがあるということ。

③ 電気的なメディアの中の声は、声を客体として加工し編集することで「作品」となり、語り・歌う者の存在を想起させて流通したり、声を発した身体から切り離されたものとして人々に多様に受容されたりすることがあるということ。

④ 電気的なメディアの中の声は、語り・歌う者の身体から声のみが引き剝がされて「商品」として流通したり、近代において語られた自我という主体に埋め込まれたものとして密かに消費されたりすることがあるということ。

⑤ 電気的なメディアの中の声は、時間的・空間的なへだたりを超えて、様々な身体が統合された「作品」として流通したり、社会的な制度や技術に組み込まれたものとして人々に享受されたりすることがあるということ。

問５　この文章の構成・展開に関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は［7］。

① 声と音とのへだたりを論拠に声から自我が切り離されていたことを指摘しながら、電気的なメディアによって言葉が主体性を獲得していく過程を論じ、近代的な社会構造において声と人間の内部との関係が変容すると総括している。

② 声と文字、声と音、さらに声と身体との対照的な関係を捉え直し、新たに近代に発明された電気的なメディアで声が身体に内在化していく経緯を説明しながら、社会的な制度や技術における言葉の関係が変容すると総括している。

③ 表現媒体としての文字、音、声、身体の区別を明確にしながら、十九世紀後半の電気的なメディアにおいて声と身体がともに加工されて外在化したことにまで論を広げ、言葉の生産と流通をめぐる関係が変容すると総括している。

④ 声と文字との関係を導入として言葉が内包するへだたりという概念を中心に論を整理しながら、新たに現れた電気的なメディアがもたらす経験について具体例を挙げて考察し、言葉をめぐる社会的な関係が変容すると総括している。

⑤ かつては声としての音が人間の内部に縛られていたことを問題提起し、電気的なメディアの登場によって声が主体から解放されていく仕組みを検討しながら、音声が消費される現場で言葉と身体との関係が変容すると総括している。

問６　授業で「メディアの中の声」の本文を読んだＮさんは、次のような**【文章】**を書いた。その後、Ｎさんは**【文章】**を読み直し、語句や表現を修正することにした。このことについて、後の(i)〜(iii)の問いに答えよ。

【文章】

　ａ本文では、「電気的なメディア」によって、声とそれを発する人間の身体とが切り離されるということが述べられていた。本文を読んで気づいたことがあるので、そのことを書きたい。

たとえば、映画の吹き替え版やアニメなどが考えられる。声を発する本人の姿が見えないにもかかわらず、外国映画の俳優やアニメのキャラクター自身がその声を発しているかのように受け止めている。つまり、別の存在が発した声であっても、私たちは違和感なく聞いているのだ。

　ｂその上、私たちは声を聞いたときに、そこに実在する誰かがいるかのように考えてしまうことがある。たとえば、電話やボイスメッセージなどで家族や友人の声を聞くと、そこにその人がいるように感じて安心することがある。声と身体は一体化していて、切り離されているとは言い切れない面もあるのではないか。

　さらに考えてみると、その声は間違いなく家族や友人の声だと決定することはできないかもしれない。ｃ要するに、声によって個人を特定することは不可能なのではないだろうか。私は電話で母と姉とを取り違えてしまったことがある。また、録音した私自身の声を聞いたことがあるが、ｄふつうにそれが自分の声だとわかっていなければ誰の声か判断できなかったに違いない。

(ⅰ) 傍線部**a**「本文を読んで気づいたことがあるので、そのことを書きたい。」について、**【文章】**の内容を踏まえて、問題提起として適切な表現になるように修正したい。修正する表現として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は **8** 。

① だが、個人の声と身体とは不可分な関係にあり、声は個人の存在と強く結びついている。それでは、社会生活の具体的な場面においても、声によって他者の身体の実在を特定できるだろうか。

② だが、声は個人の身体から発せられるものであり、声と身体とは通常は結びつけて考えられる。それでは、密接な関係にあるはずの声と身体とを切り離して捉えることはできるのだろうか。

③ だが、声と身体とは強く結びついているものの、身体と声の持ち主とは必ずしも一致しない。それでは、声と身体とが一致しないことによって他者との関係性はどのように変わるのだろうか。

④ だが、声と個人の身体との関係は状況によっては異なり、つねに結びついているとは限らない。それでは、声と身体との結びつきが成立するには、具体的にどのような条件が想定されるのだろうか。

(ⅱ) 傍線部b〜dについて、【文章】の内容を踏まえて、適切な表現に修正したい。修正する表現として最も適当なものを、次の各群の①〜④のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は［9］〜［11］。

b 「その上」［9］
① そのため
② しかも
③ しかし
④ あるいは

c 「要するに」［10］
① まさに
② ところで
③ いまだに
④ やはり

d 「ふつうに」［11］
① まさか
② もし
③ あたかも
④ おそらく

(iii)　Nさんは、【文章】の末尾に全体の結論を示すことにした。どのような結論にするのがよいか。その内容の説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は **12** 。

① 他者の声については個人と身体を切り離さずに無条件に親近感を抱くことがある一方、自分自身の声を聞いたときには違和感を抱くことから、自分以外の存在に限って、声と切り離されない身体性を感じるという結論にする。

② 声を聞いたときに実在する誰かがいるかのように考えたり、身近な人間の声を聞くとその存在を感じて安心したりすることから、人間の声と身体とはつねに結びついているが、その関係は一定のものではないという結論にする。

③ 声だけで個人を特定することは難しいにもかかわらず、他者の声から安心感を得たり、自分自身の声を認識したりしていたことから、声の側に身体を重ねていたことがわかったという結論にする。

④ 声を通して人間の存在を感じたり、声を発した本人以外の何者かに身体性を感じて本人の声であっても異なる人物の声と誤解したりすることから、人間の声と身体との関係は一つに限定することはできないという結論にする。

■ 共通テスト追試験

問題番号(配点)	設　問	解答番号	正　解	配　点
第１問 (50)	1	1	2	2
		2	1	2
		3	3	2
	2	4	1	7
	3	5	5	7
	4	6	3	7
	5	7	4	7
	6	8	2	4
		9	3	2
		10	4	2
		11	2	2
		12	3	6